



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国語ブレンド型学習の実践と混合研究法による評価：遠隔交流が創る学びの経験を学習者視点で解釈する〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	杉江，聡子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第12447号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63371
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Satoko_Sugie_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名： 杉江 聡子

学位論文題名

中国語ブレンド型学習の実践と混合研究法による評価

—遠隔交流が創る学びの経験を学習者視点で解釈する—

第1章は本研究の背景を述べている。日中関係は政治的な冷え込みと裏腹に、人的交流が増加している。それに伴う中国語教育の広がりや学習者ニーズの多様化、教育情報化に伴う ICT 活用教育・学習に対する関心の高まりという社会的背景がある中で、中国語教育現場では十分な対応ができておらず、知識蓄積型の教育効果を重視する従来のパラダイムから脱却できていない。この課題を解決するために、高校中国語をフィールドにおいて中国人を相手とする遠隔交流を活用し、現実世界に開かれた言語コミュニケーションの文脈や異文化間交流を体験すること、対話を中心とする交流や協調学習による問題解決学習を通して学習した知識及び訓練した技能を実際の言語使用に積極的につなげる授業実践並びに研究を着想した。

第2章は先行研究を取り上げて、課題の整理を行った。英語では限界はあるものの優れた実践が行われる一方、中国語教育・学習においては、遠隔学習や遠隔交流を活用したブレンド型学習の事例そのものが少なく、あっても大学での実践・量的な検証、というものがほとんどだった。高校中国語をフィールドとする研究はケーススタディに留まり、評価指標や質的データ分析の方法論の検討が十分ではない。

そこで、本研究の目的を、高校のフィールドに適した ICT 活用の中国語教育・学習のためのインストラクショナル・デザインを検討し、遠隔交流を通じた中国語母語話者との対話を核とするブレンド型学習によって、学習者の学習意欲にどう影響するかという態度や認識の変化を知ること、また、そのような学習のプロセスを通じて獲得される経験、成果及びその価値を探究することに定めた。

第3章は課題解決の方略と研究デザインを述べている。遠隔交流を活用したブレンド型学習を中心に、学習の過程で学習者ニーズを随時取り入れて授業を改善しながら教師と学習者が共同で教育・学習活動を充実させていく螺旋型のインストラクショナル・デザインを設計した。また、その中心的な学習活動として、語彙・文法学習、e ラーニング（Web Based Training）、遠隔交流という3つの学習形態から構成されるブレンド型学習モデルを設計した。これは、遠隔交流に向けた準備を語彙・文法学習と e ラーニングによって整え、中国人学生との遠隔交流でインタラク

ションを実際に体験するという学習サイクルを反復的に実施するブレンド型学習モデルである。

本研究のインストラクショナル・デザイン及びブレンド型学習モデルの評価では、遠隔交流のプロセスと学習者視点の評価を対象とする混合研究法のアプローチを採用した。すなわち、遠隔交流のプロセスとインタラクションの経験に基づく成果の記述を対象とする質的データ分析、学習者視点の評価を対象とする学年末アンケートの量的データ分析、学習者視点の遠隔交流の経験と成果の認識及びそれに基づく価値づけの質的データ分析によって、多角的な評価と解釈を試みた。

第4章は具体的な実践の準備について述べ、第5章は写真・スクリプト・著者コメントを用いて、実践内容の「厚い記録」としている。

第6章のデータ分析では、量的・質的両データを、トライアングレーションモデルで併用した。量的データ分析は、学年末アンケートの集計と SPSS を用いた統計分析を行った。統計分析の対象は、学年末アンケートのうち、ICT 活用技能と学習意欲のデザインを扱う ARCS-V モデル（ケラー, 2010）を援用した質問項目の回答である。質的データ分析は、SCAT（Steps for Coding and Theorization）（大谷, 2008b, 2011）を採用し、学習者の語りに基づき学習者個人の概念を再文脈化して記述すると共にプロセス図を作成して可視化した。また、学習者全体の概念を整理した上で、テキストマイニングツールの KHCoder（樋口, 2014）を用いて概念図を作成して可視化した。

第7章の考察では、本実践の価値が、次の3つの観点から明らかとなった。(1) 学習者視点の評価から、学習経験と成果の認識に基づく価値が創出された。量的分析からは、学習者の満足度と学習意欲の向上について、質的分析からは、発見や気付き、成功体験の獲得に基づく喜びと満足感、教師とのラポールと支援環境による緊張と不安の軽減と緩和、失敗経験に基づく反省、課題の認識、目標の設定における価値が学習意欲やモチベーションの向上に結び付くことが明らかとなった。特に、学習者が教師、中国語 NS、学習者間とのインタラクションを通じて対話を重ねる過程で、学習体験や交流のプロセスそのものを楽しむというコンサマトリー（自己充足的）な価値が創出されたといえる。さらに、質的分析からは、日中関係を考える上での判断基準の形成というメディア・リテラシー育成にも通じる学習成果が得られた。また、学習歴の有無によって、対面交流に対する不安や緊張、交流相手の印象、学習効果の認識、反省や課題の認識と目標意識、遠隔交流の意義、学習者集団における立場と役割の面で、学習成果の認識や価値付けが異なることがわかった。

(2) 遠隔交流のインタラクションの経験に基づく価値について、生きたことばの習得と学習の強化、視覚情報によるコミュニケーション成立、フォローや励ましによる自信の強化と協調学習の成立、共同体験によるインタラクティブな学習の成立と仲間意識の形成、失敗に対する抵抗感の軽減といった質的な価値が創出されることがわかった。(3) 教育的観点からの評価から、交流準備段階の学習活動と遠隔交流の本番において学習者が感じる困難、学習支援を提供すべき3つのタイミング、学習支援方略と教師が果たす役割について、実践とデータに基づく具体的な知見が得られた。

第8章ではここまでの議論をもとに、いくつかの結論を導いた。学習した言語の知識と技能を遠隔交流で実際に活用する経験を蓄積できるブレンド型学習モデルを組み込んだ螺旋型のインストラクショナル・デザインは、学習者にとって必要な支援が得られやすい学習環境のデザインであり、中国語学習にとって有効であることがわかった。同時に、このような学習環境のデザインにおいては、学習活動における学習者の自律性と教師のコントロールのバランス、遠隔交流における円滑な進行と教師の介入頻度のバランスが、学習経験と成果の質に大きく影響するという課題も明らかになった。

本研究は、先行研究で残されてきた課題に対して、社会的ニーズをふまえた研究課題の設定、課題を解決するための理論的枠組みと方法論の採用、学習者ニーズに即した新規性の高いインストラクショナル・デザインとブレンド型学習モデルの開発及び実践、学習プロセスの詳細な記述と分析、学習者視点の評価に対する混合研究法のアプローチ、分析手法と結果に対する信頼性の担保（再現性と恣意性の問題に配慮した分析プロセス）を行うことで、独創性、新規性、信頼性の高い研究成果をもたらした。本研究の成果から、中国語教育・学習のみならず、教育学、応用言語学、異文化間コミュニケーション等の隣接領域にとっても有意義な知見が得られたといえるだろう。